2025年大阪万博開催に期待すること

小林 潔司
土木学会 第106代会長

２０２５年の万国博覧会（万博）が、大阪で開催されることが決まった。おりしも、関西は空前のインバウンド観光客の増加に沸き立っている。２０１８年前半における訪日外国人の約４割が大阪を訪れており、東京都への訪問率を超えている。台風21号の影響により、関西への観光需要は一時的に打撃を受けたが、すでに回復したと考えてもいい。それとあわせて、ホテル施設、アクセス交通容量の不足がすでに顕在化しており、インバウンド観光客を受け入れるためのインフラ整備が急務となっている。２０２５年の大阪万博の開催までに、インバウンド観光客の受け入れ態勢を強化しなくてはいけない。

１９７０年に開催された大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」であった。進歩と調和という共存が困難な世界的主題を掲げ、訪れた人に人類の高い理想を追い求めることの重要性を訴えた。そして「太陽の塔」はその原点として万博の輝かしいシンボルであった。その理想の高さに身震いをしたことを思い出す。１９７０年大阪万博は、先進的な知識や技術をモチーフとした巨大なテーマパークだった。大阪万博を契機に、多くの新しい製品やサービスが生まれ、そのなかから国際市場でビジネスを展開する世界的企業が生まれた。

２０２５年大阪万博のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」である。「１００歳まで生きるとはどういうことか」という人類が抱える大きなテーマへの挑戦でもある。先進国における少子高齢化の進展、途上国で

の人口爆発といった人類の将来をにらみつつ、人間の命という本源的な問題と向き合う。そこに世界中の知恵や哲学と次世代のテクノロジーを集めて、人びとの一生の価値の問題に取り組んでいく。2025年大阪万博の開催が、わが国だけではなく、世界的規模において命に関わる新しいイノベーションや社会実験を行うきっかけにつながってほしい。

いま、関西は2025年大阪万博の開催決定に沸き立っている。しかし、大阪万博の開催はゴールではない。ましてや、時限的テーマパークを開催すればいいという時代でもない。むしろ、スタート点である。大阪万博のテーマ性が契機となり、若者や子どもたちのなかから、新しい気概や夢をもった将来を担う才能が生まれる。現役世代や中高年の方がたが、命のありがたさを再認識し、自分の人生に対して、どういう投資をすべきかを考える。そういうきっかけをつくる場にしなくてはならない。

昔から新しいモノ好きな大阪のまちと人びと。「なければつくってしまえ！」、脈々（みゃくみゃく）と流れる大阪の気質である。2025年大阪万博をきっかけに、人びとが長くなった人生の価値を真剣に考え、そこからさまざまな技術的なイノベーションや新技術導入のための実験的な試みが繰り広げられる。そのような先進性が世界的規模のインバウンド観光拠点の魅力となりうる。さらにいえば、知識や技術は国境を知らない。このような「実験都市」が、日本や世界の各地で発展することを期待するしだいである。